

令和七年度

水について考える

第四十七回 「全日本中学生水の作文コンクール」 茨城県優秀作品集

茨城県

第四十七回 茨城県優秀作品（令和七年度）

【最優秀賞】

川と共に生きる

茨城大学教育学部附属中学校

二年

中島

千智

1

【優秀賞】

流れる水のその先は

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校附属中学校

三年

山本

華穂

3

私たちの水と森

茨城大学教育学部附属中学校

三年

大越

玲舞

5

ヤマメを残すために

茨城大学教育学部附属中学校

三年

戸崎

陽菜

7

水

水戸市立第四中学校

二年

安村

夏奈

羽

9

【入選】

大切な水と脅威の水

茨城大学教育学部附属中学校

三年

北野

彩奈

11

国を越えて水を守る

茨城大学教育学部附属中学校

三年

村井

愛莉

13

未来は水で笑顔に

茨城大学教育学部附属中学校

三年

村木

涼音

15

黄金色の稲穂のために

茨城大学教育学部附属中学校

一年

田村

美桜

17

培われた技術と水

茨城大学教育学部附属中学校

一年

山崎

千鶴

19

「水の日」及び「水の週間」について

.....

第四十七回 「全日本中学生水の作文コンクール」 茨城県審査について

.....

第四十七回

茨城県優秀作品

（令和七年度）

最優秀賞

川と共に生きる

茨城大学教育学部附属中学校

二年 中島千智

私の住む水戸市は『水の都』と呼ばれている。市内には那珂川や桜川などの川が流れ、千波湖や大塚池といった湖や池もあり、水に恵まれた自然豊かな土地だ。また、川は人や物を運ぶ役割を果たし、地域の暮らしや産業を発展させてきた歴史もある。私の家も那珂川のすぐそばにあり、水はとても身近な存在だ。那珂川の流れは雄大で、眺めていると時間がゆっくりと流れていくように感じる。また、四季を通して、様々な鳥や植物を観察することができ、秋には、鮭が遡上する様子を見ることもできる。私は川の近くでの穏やかな暮らしがとても気に入っている。

しかし、そんな私の川に対する印象を一変させる

出来事が起こった。令和元年十月に発生した台風十九号だ。当時、私は小学二年生だった。雨はだんだん激しくなり、那珂川の水位も徐々に上昇していった。夜になり、両親に「大丈夫だよ」と言われて布団に入ったが、不安でなかなか寝つくことができなかった。明け方、両親に起こされると、「那珂川が氾濫しています。避難してください」という警報が鳴り響いていた。私達も、すぐに親戚の家に避難することにした。その後、那珂川の水位は徐々に下がり始め、私達は無事に自宅に戻ることができた。しかし、市内では複数の場所で氾濫が起こり、家屋や道路の浸水など、多くの被害が発生した。近くの橋へ川の様子を見に行くと、いつも見ていた綺麗な川の水は茶色い濁流と化し、大量の木々やドラム缶などが流れていた。これまでの穏やかな川の様子とは大きく異なり、驚いて怖かったことを今でも覚えている。

それから、那珂川では大規模な治水工事が始まった。河道の樹木の伐採や土砂の掘削により川幅が広げられ、掘削した土砂を利用して堤防整備が進めら

れた。これにより、大雨で川が増水したときの水位の上昇を抑え、氾濫のリスクを軽減できるようになった。整備された堤防では、散歩やサイクリングを楽しむ人や、河川敷でサッカーをする人々の姿も見られ、那珂川は災害前の日常を取り戻したように感じる。しかし、全国各地で豪雨災害のニュースは後を絶たず、私は台風十九号での経験を忘れることは決してなかった。

中学生になった私は、探求の授業で水害と洪水対策について調べることにした。調べてみると、日本の大雨の発生頻度は四十年前と比較して二倍程度に増加しており、地球温暖化が原因の一つであることが分かった。また、洪水対策として、増水した川の水を地下の貯水施設に溜め他の川へ放出する『首都圏外郭放水路』や、大洪水でも決壊しないよう堤防の高さの約三十倍もの幅を持たせた『高規格堤防』が建設されていることを知った。これらは都市部で洪水の被害を防ぎ、人々の命を守るために活用されているが、完成までに莫大な費用と時間がかかるため、全国に普及することは難しいと感じた。

その他の対策として、雨水を農地や森林などの地に浸透、貯留させ、ゆっくりと河川に流れ込ませる『グリーンインフラ』がある。私達の身近にある公園や校庭などもグリーンインフラとして活用することができ、洪水被害を軽減しながら、都市の緑化、環境保全にもつながる取り組みであり、行政、住民、企業が連携して進めていく必要があると感じた。また、豪雨の発生原因となる地球温暖化を抑制するために、エコバッグの使用や節電など私達にできることを続けていくことも重要だと考える。

今日も那珂川は悠々と流れている。これから川と共に暮らしていくために、そして、この景観がいつまでも続くように、私は今できることを考え行動していきたいと思う。

優 秀 賞

流れる水のその先は

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校附属中学校

三年 山 本 華 穂

自分の家から流れる水が、どこへ、どのようにして流れていくのか、どれほどの人が知っているだろうか。私も、社会科の授業で下水道の仕組みや役割を学んだことはあるが、当時それはあくまでも教科書の中の話だった。けれどもある日、私はそれが家の外で大きな音を響かせながら造られていくのを目の当たりにした。「あ、この仕組みは本当に私達の生活のすぐそばにあるんだ。」と、その時初めて実感した。

今の家に引っ越し少し前、母に「新しい家は浄化槽なんだって、下水道に変える工事をしないといけないんだよね。」と話をされた。私は、その時はまだ関心を持っていなかったと思う。正直、自分の

家の水がどうなっているのか、なぜ下水道に変える工事をしなければならないのか、考えたこともなかったのだ。しかし、家の外で鳴り響く工事の音を聞くうちに「なぜこの工事が必要なのか」「浄化槽と下水道は何が違うのか」そんな疑問が次々と浮かんできた。きっと、それらは私達の生活になくてはならないものはずだ。そうして私は、水の仕組みを自分のこととして考えるようになった。

私は引っ越し前の母との会話では、「浄化槽から下水道に変えるならば、下水道の方がメリットが多いのかな。」と考えていた。しかし調べてみると、浄化槽と下水道にはどちらもメリット・デメリットがあることがわかった。まず、浄化槽は自分の家で水をきれいにする仕組みで、下水道は水を遠くの処理場まで運ぶ仕組み、という違いがある。浄化槽は小さな工事ですぐに使えるが、においが出るし、環境への負担もあるという。一方で、下水道は、たくさんのお家の水をしっかりきれいにできるが、整備するのに、時間もお金もかかるのだ。そこまで調べて、私の家が下水道の工事をしたのは、地域全体の水を

きれいに保つたためなのかもしれないと思った。

下水道や浄化槽などのインフラは、私達の生活を支える大切な役割を果たしていることを改めて学んだ。これらは単純な設備ではなく、私達が日々使う水を無駄にせず、きれいにし、自然に戻すために必要不可欠な存在なのだ。水は流れては蒸発し、雨となってまた降り注ぎ、自然の中で循環し続ける。私達が使った水も、適切に処理されれば、再び自然の一部となって戻っていくことができる。浄化槽や下水道といった仕組みがうまく機能していることで私達が安心して生活できることを実感した。家の中で使った水がどうなるのか、どんな仕組みできれいになっているのか。今まで知らなかった「水のゆくえ」を、初めて辿れた気がした。

これまで私は、水を使うことが当たり前で、その後どうなるのか考えたこともなかった。けれども今回の経験を通して、使った水をきれいにして自然に返す責任も私達の生活に含まれていることを知った。これからは、水を「ただ使うだけのもの」としてではなく「自然の中を旅していくもの、使うたび

に還していかなければならないもの」として考えていきたい。そして、私達が安心して水を使えるのは、目に見えないところで水の旅を支えてくれているインフラがあるからだということも忘れずにいたい。自分の身の回りの、様々な生活の仕組みに目を向け、見えないところで世界を支えてくれている人たちへの感謝の心を持ち、私も、自然の循環を支えるような行動をしたいと思う。そうやってこれからも、私達の生命を育む水とそれを守る仕組みを意識しながら、水の大切さを忘れずに日々を過ごしていきたい。流れる水が旅する先にあるのは、きっと私達の未来なのだ。

優 秀 賞

私たちの水と森

茨城大学教育学部附属中学校

三年 大 越 玲 舞

水は、目には見えない場所で生命を支え、いろいろな場所を巡りながら世界を形づくっている。私は幼い頃から、その大切さを自然と学んできていた。父が林業に携わる仕事をしていることで、森は身近で特別な存在になった。父が山に植える苗木は、やがて木々へと成長し、森を造り、水を守る。その役割を理解するにつれ、私は森と水の循環に対する想いを深めていった。

森は水を育む。雨が降り注ぎ、木々の根がその水を受け止め、ゆっくりと地中へ送り込む。そして、蓄えられた水は、やがて川となり、湖となり、人々の暮らしへとつながる。父の仕事は、ただ木を育てるだけではなく、この循環を維持し、豊かな水を守る

るものだった。「間伐を行うことで森は健全な状態を保ち、過剰な水流を防ぎながら、ゆっくりと生命を育む。」私が間伐体験をした時に、父はそれを当然のことのように話し、私はその言葉を聞きながら、森の営みを身近に感じていた。

私が住んでいる水戸市もまた、水と共に歩んできた土地である。街を流れる那珂川、穏やかに広がる千波湖。特に千波湖は、私が小さな頃からずっと遊び場にしていた場所だ。

しかし、ある頃から夏になるとドブのような異臭がするようになった。なぜ、そんな風になってしまったのか、私は悲しくなり調べていくとアオコに辿り着いた。そして、アオコが発生してしまうのは、水の循環が悪化していたためだと解った。

そもそも千波湖は、徳川光圀公（水戸黄門様）の偉業の一つで、歴史書には、千波湖の整備や治水工事を行い、水戸藩の民衆の生活を守るために水利事業を推進した、と記述されている。千波湖は水戸藩の重要な水源であり、その水は農業や生活に欠かせなかった。しかし、水の循環が悪化すると水質が低

下する。この問題を防ぐため、光圀公は治水工事を行い、水の流れを改善した。また、堤防を整備し、洪水から民衆を守った。光圀公の施策により、千波湖の水は長く利用され、水戸藩の発展に寄与した。光圀公の水に対する深い理解と民を思う心は、今も語り継がれている。

現在、茨城県と水戸市は、共同で千波湖導水事業に取り組み、那珂川から水を桜川へ、そして桜川から千波湖へ送水し、最大一秒間に三トンの水を流すことで、水の入れ替えを行い、水質の改善をしている。このように、今でも市民の生活のために水の課題に取り組んでいることが分かった。

そんな水と森のつながりを、私はある日、実際に体験する機会を得た。水戸市森林公園で行われた植樹祭で、父と一緒に針葉樹・広葉樹の苗木を、土を掘り、根を広げて、植え付けを行った。思ったより暑くて大変だったため、今でも鮮明に覚えている。そして、「この木が大きくなれば、森がもつと豊かになり、水と共に自分たちの生活も豊かになるよ」と父が言った。その言葉を聞いた時、私は目の前の

小さな苗が明るい未来へと続く道を切り開くような気がした。

森は水を守り、水は命を支える。水戸市森林公園の植樹祭や間伐体験に参加して、ただ木を育てるだけではなく、その営みは、私たちの暮らし全体を支えるものだと思った。私が小さい頃から知らず知らずのうちに感じていたもの、水と森のつながりを、この作文を通じて強く、はっきりと感じることができた。

優秀賞

ヤマメを残すために

茨城大学教育学部附属中学校

三年 戸崎陽菜

私が思い浮かべる川にはヤマメがいる。あなたは「ヤマメ」を知っているだろうか。ヤマメは冷涼で澄んだ川にのみ生息するサケ科の魚で、「清流の女王」とも呼ばれている美しい魚だ。そんなヤマメが私は好きだ。

幼い頃から自然が好きで、よく川を見に行っていた。お気に入りの川に、いつもヤマメがいる。ヤマメは、銀色の鱗をキラキラと輝かせながら静かに泳いでいる。やさしい光がゆらゆらと揺れ、見ているだけで心がほっとする。

しかし、ヤマメの個体数が減少傾向にあるというニュースを見たときは、とても衝撃を受けた。かつては各地で豊富に生息していたヤマメだが、近年

では河川の埋め立てや水質汚濁、水温上昇などにより、生息域が狭まってしまったことが背景にあるそうだ。これにより、ヤマメは準絶滅危種にも指定され、保全がさらに高まった。身近な生き物だったため、ヤマメの存在が危うい状態だとは思ひもしなかった自分が情けないとさえ思えた。しかし、これも全て私たち人間が行ったこと。私たちによって変えられた環境がヤマメの危機に繋がってしまったのだ。その危機を見過ごすことは無責任がすぎると私は思った。自分たち人間が責任をもってヤマメが生きられる環境へ再び変えていくべきだと思う。ヤマメが住みやすい環境へ変えるため、自分ができることに積極的に取り組みようと決めた。

そんな衝撃と小さな決意を後にし、まずはヤマメを知ることから始めた。インターネットで調べるとヤマメは、川の水質環境を評価するための環境指標生物の一つであることが分かった。水生生物は、その生息環境に影響を大きく受けるため、水質や水温などの環境条件が変化すると、そこに生息する生物の種類や個体数も変化する。このような特徴を利

用し、水生生物の種類や個体数を水質の指標として利用するのが「環境指標生物」であるヤマメは一般的に、水質が良い上流部に生息し、水温が低い場所を好むため、その存在は水質が綺麗であることを示唆するそう。したがって、ヤマメを保護するためには、水質の保全と水温の上昇対策に加えて子孫を残しやすいその環境を保つことが重要になると思っ

た。
実際にヤマメの個体数を増やすために、ヤマメの稚魚を放流したり、人口産卵場の設置をしたりするなどの取り組みが行われている。ヤマメの住める綺麗な川づくりを目指して取り組むことはとても良いと思うが、どの取り組みも行っているのは高齢者が多い。

未来に残していくには子供の頃から関心をもつことが大切だと考える。そのために、まずは若い人たちが経験できる「きっかけ」をつくることが重要だと思う。具体的には、それぞれの取り組みを小学校の授業に取り入れることや地域のイベントを活用することだ。このような「知る」活動を通すことで、

若い人たちが関心をもつことにつながると思った。そして、若い人たちが次の世代へ「伝える」ことで、知る・伝えるのサイクルが生まれる。私は、そのサイクルを通すことで、持続可能な生態系の維持につながる仕組みづくりができると考えている。

さて、中学生の私に何ができるだろうか。今の私にできることはきつと限られている。しかし、SDGsに取り組んだり、ボランティア活動に参加したりすることはできる。決して大きな力ではないと思うが、誰でもできることである。未来に残すために一人ひとりの問題意識を高めることが重要であると思う。私は、全体を見据えて自分ができることに取り組み、周りに良い影響を波及していきたい。

優秀賞

水

水戸市立第四中学校

二年 安村 夏奈羽

「水」とは、人間をはじめ、生物が生きる上で欠かせないものである。水がなければ生物は干からびて死んでしまう。また、普段私達が口にする農作物や家畜を育てることに水は必要であり、洗濯や料理、入浴、掃除といった私達の日々の生活にも水は不可欠だ。私達人間は、水によってその生活を支えられていると言っても過言ではないだろう。

日本は島国で周りを海に囲まれていることもあり、水産資源が豊富にあるほか、山や森林が気候に守られ、水が豊富にある。私達は毎日水道の蛇口をひねるだけで綺麗な水を飲むことができる。しかし、それが当たり前なのだと疑いもせず暮らしてはいないだろうか。

世界的に見ると、日本のように綺麗な飲み水を簡単に得られるところは実は非常に少ない。上下水道や浄水場といった

設備が十分に普及していない国や地域は多い。水道は通っていても飲み水としての安全性は保障されていない所もあり、「飲み水が確保できる水道」が通っている国は十数カ国程度とも言われる。海外の人が日本を訪れて驚くことのひとつに、水道の水が飲めることだと言う人も多い。反対に家族が海外旅行に行った時には、水道の水が飲めないため、まずスーパ―を探して水を買ったという話を聞いて私はとても驚いた。

日本には、集めた水をろ過し不純物を取り除き水を綺麗にする浄水場がある。そして、その水が水道管を通り私達の家々の蛇口までつながっているからこそ、今の私はのが渴いた時、飲みたい時に自由に水が飲める生活を送っている。しかし国が変われば水が満足に飲めない子供達はたくさんいる。川へ水を汲むために一日中歩いて学校に行く時間のない子供達や、汚れた水によって感染症がまん延し、命を落とす私とかわらない歳の子供達がいることも報道番組で目にしたことがある。世界に目を向けると、安全な水が飲めることはとても幸せで、大切にしなければならぬと私達は知ることができるだろう。

しかし、例えば日本であっても、常に綺麗な水を利用できるわけではない。

例えば山の上では、水道設備が整っていないため水はとても貴重だ。以前、登山に行った時、山小屋には水洗トイレはなく、あるのは汲み取り式トイレ、しかも使用するにはお金を払う必要があった。また売店で売っている水も通常より高い値段だった。それは、車の通れない山の上まで重たい水を運搬しなければ手にできない貴重な水だからである。

また、台風や大地震など災害時には断水が起ることもある。私が生まれる前に起きた東日本大震災では、水戸市でも電気、ガス、水道といったライフラインが全て止まり、元に戻るまでに何日もかかったという。その間、家族は電気と水道のない生活を四日間送ったと、当時の苦労をよく話してくれる。その経験から、我が家では水道も電気も使わない日を過ごす取り組みをしている。これが、私が水を大切にすることをきだと思っただけだ。

その日は、丸一日、家のなかの電気と水を全く使わないようにして生活した。水道からは水をくめないで、災害対策として買ってあったペットボトルの水を飲み、お風呂にも入れないため体をタオルで拭き、トイレは水洗レバーで流さず浴槽に溜まった水を洗面器で汲んで流した。衣類で体温調節をし、ソーラーライトや懐中電灯を使って、薄暗いなかでカ

セットコンロを使いレトルト食品を温め食べた。その時、たった一日水や電気を普段通りに使えなかっただけでこんなに手間が増え不便なのかと実感したのだ。

日本で暮らしていると、安全な水を飲むことができるのは当たり前に感じてしまうが、それは本当はとても貴重なことなのだ。だから私達はそのことに感謝し、水を大切に使うべきだ。地球の環境を守り、水という資源を守り、大切に使う必要があると責任が私達にはある。

入 選

大切な水と脅威の水

茨城大学教育学部附属中学校

三年 北 野 彩 奈

水は、私達の生活に欠かせないものです。料理、洗たく、洗顔など様々な事に水を使用します。でも、今水は問題を抱えています。

まず、一つ目は、最近の米不足に関連する水問題です。私は先日、母とスーパーに行ったのですが、米売り場にお米が無くて、とても驚きました。また、仮にお米があつた場合でも、これまでの二倍以上の価格であり、私達の生活に大打撃を与えています。

この米不足には、様々な要因がありますが、その中の一つが、気候変動によるものです。地球温暖化による気温の上昇、猛暑などの異常気象により、米の品質低下、収穫量の減少が起きました。今後更に、気候変動が続いた場合、米の生育に大切な水環境と、

水資源にも大きな問題が生じてきます。

まず水環境ですが、環境省によりますと、気温の上昇が、湖沼、ダム貯水池、河川などの水温を上昇させ、水質に影響を及ぼしていくそうです。そして水資源ですが、降水パターンの変化が、無降水日数の増加、積雪量の減少、蒸発散量の増加を起こし、河川流量への減少を引き起こすそうです。以上の事は、米の生育の必要な時に、必要な量の水が、供給出来ない可能性があるという事です。米を守るためには、水を守る必要があるのです。

そして、二つ目は、気候変動による洪水、集中豪雨の増加です。国土交通省によりますと、近年、一時間に降水量五十ミリ以上の雨の回数が増加しており、三十年前と比較すると約一・四倍にもなるそうです。一時間に五十ミリの雨とは、傘が全く役に立たず、道路が水しぶきで一面真っ白になる状態です。当然、水災害の危険性も高まってきます。

昨年九月の石川県奥能登での水災害は、まだ地震から立ち直られていない能登の方々の心に、大きなダメージを与える水災害であつたと思います。私

が皆さんの立場でしたら、心が折れて、悲しい気持ちになります。私達の大切な水が、私達の生活を脅かしたのです。

今こそ、私達は変わらなければなりません。地球温暖化の原因の一つである二酸化炭素排出量を減少させる為、ペットボトル、レジ袋の使用を控え、今すぐマイボトル、エコバッグの使用へ切り替えます。

また、マイボトルへの飲料が補充出来るシステムが無いか、調べてみました。なぜなら、マイボトルが空になった時に、補充が出来なければ、ペットボトル飲料を購入する必要がでくるからです。調べてみた所、ある大手企業が、消費者のマイボトルに対応した自動販売機を、商業施設などに設置する実証実験を行った事が分かりました。そして、今年までに約五百台の設置を目指しているそうです。企業も地球温暖化抑制の為に、努力されています。私達も出来る事をしなければなりません。

技術の進歩により、私達の生活は便利になりましたが、その結果、地球は悲鳴をあげる事になった

のです。私達には、傷ついた地球を修復する責任があります。二酸化炭素排出量を抑える為に、節電、節水などを心がける事はもちろんですが、二酸化炭素を吸収する植物、野菜を育てるのも一つの方法です。家の庭や、ベランダでも簡単に出来ます。植物は人々に安らぎを与え、心を落ち着かせてくれます。そして、自分で育てた野菜は、日々の成長を観察するのも楽しく、収穫時の喜びも感じられます。

水は大切な反面、脅威にもなります。だから、地球環境をより良くしていく事が大切なのです。未来の地球と水の運命は、私達にかかっているのです。

入 選

国を越えて水を守る

茨城大学教育学部附属中学校

三年 村 井 愛 莉

持続可能な社会を目指して国連総会で定められた「SDGs」。その中の一つに、こんな目標が掲げられています。

「安全な水とトイレを世界中に」

果たして、この目標は実現されているのでしょうか。二〇二五年現在、水道の設備がない暮らしをしている人は、世界で二十二億人以上います。世界の総人口が約八十億人なので四人に一人が水の供給が不足しているという状況です。私はこの状況を少しでも改善したいと思い、詳しく調べることにしました。

そこで、私はとある動画を見つけました。「水道がない地域に生まれた女の子の一日と」というタイ

トルとともに、一人の少女とラクダがうつつていました。正直、私は「さすがに大げさだな」と感じました。けれど、その動画の再生ボタンを押し、動画を見てみるとそこには、広大な砂漠をラクダを引き連れて歩く少女、必死になって水をタンクに汲む少女の姿がありました。私はこの光景を見て、言葉にできない不思議な気持ちがかみ上げてきました。どうにかしてあげたい、けど自分の手ではどうすることもできない、もどかしい気持ちでいっぱいでした。

少女はまだ十三歳、暑い日も寒い日も八時間かけて水を汲みに歩くのです。今日を生きるために。少女が汲んでくる水は、決して安全とはいえない地表水と呼ばれる水で、その水を使うには一度ろ過するため、一日に使える水はわずか五リットルほどです。当然、少女は一日の三分の一を水汲み作業が占めているため、学校に通えていません。けれど、少女や家族にとっては、生きていくために必要なことなのです。

少女のように世界中の女の子や女性たちが水汲みに費やす一日当たりの時間の総計は、二億時間と

言われています。二億時間と聞いても、私たちは想像が付きません。それくらい少女たちは今日を、明日を生きるために、懸命に働いているのです。

もちろん、水道設備の不便から労働を余儀なくされているのは少女だけではありません。アフリカ、アジアなどほとんどの国に安全な水が届けられていないため、水汲みという労働を強いられ、教育もともに受けられません。子供にとって過重労働な水汲みや、不衛生な水質などの影響で、一日八百人の子供が命を落としています。私たちは、こんな劣悪な環境を他人事だからと言って、見て見ぬふりをしているのでしょうか。私たちにできることはきっとあるはずです。

不衛生な環境を生きる子供たちに私たちができること、それは水源保護だと思っています。現在、各国で都市化が進み、森林伐採によって水を蓄積していた森が減少したり、人間が排出した生活排水が川や海へ流れ出ています。日本には浄水場などが存在しますが、世界にはこのような設備が不足しているため、一度汚染された水はそのまま使用せざるを得な

くなり、安全で綺麗な水は不足していく一方なのです。そこで私たちが今ある水源を守っていくことで、少しでも改善につながります。水路や川の清掃ボランティアに参加する、世界各地で起こっている問題について知り、周囲に呼びかける、などの行動で状況は変えることができます。一人一人が意識をして、行動を起こすことが大切です。

国連総会が定めた目標の年まであと五年。世界には他にも解決しなければならぬ問題がたくさんあります。二〇三〇年に必ず実現されるのか、まだ誰にも分かりません。ただ私は信じ続けます。子供たちの笑顔が増える日を願って。

入 選

未来は水で笑顔に

茨城大学教育学部附属中学校

三年 村 木 涼 音

私たちの日常生活は水で溢れています。例えば、朝起きたら顔を洗い、朝ご飯を食べます。そして、歯を磨いたり、トイレに行ったりします。毎日当たり前にしていること全てにたくさんの水が使われています。日本ではこれが当たり前です。しかし、世界ではどうでしょう。

私は、あまり水について深く意識したことがありませんでした。「節水を心がけよう。」「水を大切に使おう。」など、小さな頃からこのような言葉はよく目にするし、耳にもします。でも私はそれを重く受け止めず、その言葉の重要さを理解しないで過ごしてしまっていました。

しかし、その私を変えるきっかけをくれた出来

事があります。それは、「アイシャ」という少女との出会いです。小学六年生の時に見た、日本ユニセフ協会が投稿している動画の中に彼女は存在していました。水汲みに費やす時間は毎日八時間、朝早くから夕方まで、家族のために砂漠を懸命に歩き続けます。しかし、手に入るのはわずか一人あたり五リ未満の茶色い水だけです。（日本ユニセフ協会「どんなに汚くてもこの水を飲むしかない」二〇二五年五月閲覧）彼女は十三歳で私とあまり変わりません。日本とエチオピアという住んでいる場所が違うだけです。本当は、学校に行きたいかもしれませんが。勉強したいかもしれません。でも家族のため、生きるために、水を汲むしかありません。茶色い水を飲むしかありません。彼女の悲しそうな表情は今でも鮮明に覚えています。画面上から、苦しい気持ちが伝わってくると感じました。アイシャの立場に立ち、その状況を考えてみると、毎日綺麗な水をなんの躊躇もなく使えていること。学校に行って勉強したり、友達と話せていること。これら全てが当たり前ではないことを理解しなければならなかったと思いました。

そして、日本に生まれ、恵まれた環境で生活できている今に感謝する必要があると感じました。

私たちにできることはたくさんあると思います。三千円の支援が汚れた水を安全な飲み水にする浄水剤七・〇二五錠（三五・一二五L分）に変わります。五千円の支援が下痢による脱水症から子供の命を守るORS（経口補水塩）七四八袋に変わります。（日本ユニセフ協会「募金・支援」二〇二五年五月閲覧）私自身は、まだ中学生で収入を得ることはできません。しかし、大人になった時、自分の力で支援をしたいし、しなくてはならないと考えています。大きなことじゃなくても、身近なことでは、ことはたくさんあります。家庭での水の使用は大きな影響を与えています。シャワーの時間を短くしたり、食器を洗う際に水を流しっぱなしにしたりしないこと。洗濯をするときには洗濯機の容量を最大限に活用し、必要な分だけを一度に洗うこと。このようになわずかな行動が水の使用量を抑えることができます。そして、これらの一人一人の小さな活動がこれからの未来をつくっていくのではないの

でしょうか。

世界には水不足で困っている人がたくさんいること。この事実を私たちは重く受け止めるべきだと思います。私たちはそれを頭に入れ、できること、やらなければいけないことを考え、行動していかなければいけません。私は、アイシャのことを忘れません。直接助けてあげることができないけれど、自分にできる最大限のことをしていきたいと思っています。その意思、行動の一つ一つが何かを変えるのではないのでしょうか。私は、今の状況を知り、水を守れる人が少しでもいいから増えることを望みます。いつか、世界中のすべての人が安心して水を飲み、笑顔になれる日が来ることを願って…。

入 選

黄金色の稲穂のために

茨城大学教育学部附属中学校

一年 田 村 美 桜

私の家の前は、一面田んぼである。日頃から見慣れた風景なので気にしたこともなかったが、ニュースや新聞で米の価格が高騰し、米がスーパーなどの店頭からなくなり、手に入れることが難しくなっていると感じた。改めて家の前の田んぼを見て、こんなに広大な田んぼがあり、そこで米を作り、収穫しているのになぜ米が不足しているのだろうと思った。そして、毎日当たり前のように食べている米についてもっと知りたくなった。

米は私たちの主食であり、食事に欠かせないものである。おいしい米を作るには水が重要である。家の前の田んぼでは近くの川から水を汲み上げ、用水路を通り、田んぼまで水を運んでいる。私の祖父

は高齢で米作りをやめてしまっていたが、当時のことを聞いてみると、やはり、家の裏にある川から発動機を使って、水を汲み上げ、毎日朝と夕に田んぼに水を入れていたそうだ。水もただ入れればよいというものではなく、育つ過程に合わせて水の量の調節が必要でそれによっても米の味が変わってしまうと言っていた。祖父の話を聞いて、米作りの大変さと水の重要さを知ったと同時にその水が不足したり、とても汚れていたら大変だと考えた。

私は、日本には川が多いし、梅雨や台風の時期もあるため、水は豊富にあるのだろうと思っていた。しかし、最近の異常気象により雨の降り方が変わり、雨が少ない年があったり、雨が降らない日数が増えたりして安定的な水の利用が難しくなっているようだ。しかも、日本は一人当たりの水の使用量が世界で二番目に多いということに驚いた。都市部の人口増加や産業の集中も水の消費量を増やしているのだが、私がまず自分で出来ることは何だろうかと考えてみた。身近なことですぐに実行できるとしたら、安易だが、やはり節水を意識するということだろう

か。朝起きて顔を洗ったり、歯磨きをしたりする時に水を流しっぱなしにするのではなく、こまめに止める。入浴時に必要以上の洗剤を使わないなど意識すれば実践できることは多くあることに気付いた。母にも普段している節水対策はあるか聞いてみたところ、お風呂の残り湯で洗濯をしていたり、水道の元栓を少し閉めて必要以上の水が出ないようにしたりして工夫しているそうだ。家族で水の大切さについて話し合うことがあまりなかったので、このような機会を持ててよかった。

次に水の汚染について考えた。日本では水道の蛇口をひねれば、きれいな水が出てそのまま飲むことができるので、どの国でもそうなのだろうと思っていた。ところが、日本以外では十ヶ国ほどしか水をそのまま飲むことが出来ないそうだ。水を川からくみ、汚れや細菌を取り除いてきれいな水にするには大きな資金と大きな施設が必要なため、発展途上国など水道施設にお金をかけられない国では水道自体があまり使われていないのだ。私が毎日使っている水は当たり前のもではなく、飲めるようにきれ

いにしてくれているからだと知った。きれいにするから川の水は汚くてもよいということではなく、きれいにする作業が最小限で済むように入浴時に使う洗剤を適量にしたり、食器を洗う前に油污れを紙で拭き取ったりして努力することが必要だと思った。

私の家の前の広大な田んぼは、ちょうど田植えを終えたばかりだ。その田んぼには、水が張られ、青々とした苗が見える。川から汲み上げたその水が少しでもきれいで不足することのないよう日常生活で出来ることを実行しながら、苗が育ち、稲穂が実り、黄金色になって米として収穫されるまでを見守りたいと思う。

入 選

培われた技術と水

茨城大学教育学部附属中学校

一年 山 崎 千 鶴

私の家の近くには、「逆川緑地公園」という水と緑の豊かな場所がある。小さな頃は逆川沿いの土手や芝生が遊び場だった。今では犬を連れていくのが日常だ。鳥たち、草花、川の様子が四季折々違って見える。冬の朝、川面からホワホワと湯気のように霧が立ちのぼってくる幻想的な風景が特に好きだ。

それを「気嵐」と呼ぶのを知ったのは最近のことだ。私の犬がこの公園を走り回ると、足元からお腹までびしょびしょになる。木道の左右に生える植物はシダやコケが多く、いつも空気がしめっているように思う。その散歩の途中には「笠原水源」がある。竜頭を形どった蛇口に水を汲みに来ている人をよく見かける。飲用水として利用できるそうで、ここはか

つて水戸になくってはならなかった水道の源泉なのだ。水戸の二代藩主である徳川光圀は、初代藩主の頼房から引き継いだ下町の給水難を解決するために、水道の敷設を試みた。（「笠原水道の歴史」より引用）この時、水源地に選ばれたのがこの逆川沿いの湿地帯からの湧水だった。この辺りは逆川が侵食谷を形作り、その台地斜面から良質の水が水量も豊かに流れ出しているそうだ。また、この水源は初代頼房の代から笠原不動尊一帯の山林として特別に保護され、木々の枝葉を折ることさえ禁じられていたという。私が日頃感じてきたこの公園一帯のしめつぽさや水の豊かさは、まさに「水戸を潤す源」だったのだ。

江戸時代、千波湖を埋め立ててできた水戸の下町は、飲用水としての水質の悪さに苦しんできたが、それを笠原水源からの地下水路（暗きよ）により、下町一帯にきれいな水を導き、水量を確保できた。汚水が流れこみにくい暗きよを作るといった技術の高さは当時の水道の中でも群を抜いていたそうだ。領内の崖から切り出した凝灰石を使って、地下水路の

岩樋を作ったという。美しい水源を見つけ、谷や川を越えて十一キロメートル近い暗き水路を作るのにわずか一年半ほどしかかかっていないことに驚く。たくさんの方を工事にあたらせ、領内の石材を使うことで経費を抑えながら効率よく事業を進められたのだと思う。そこには、水戸の下町の発展を願う藩の思いを感じる。笠原水道は補修、改修をしながらなんと二百七十年ほど使われた。安心安全な水を利用することを目指し、水源を大切にするという現代に通ずる初代頼房の判断と、光圀の行動力やその周囲の技術者たちの功績に感銘を受けた。

同時に、私は以前読んだ「中村哲」医師の本を思い出した。医師でありながら日本から遠いアフガニスタンの地で用水路を築いた人物である。（「中村哲物語」より引用）中村医師の敷設した用水路壁面には「蛇かご」という工法が用いられている。

これは日本で江戸時代から護岸工事や用水路建設に用いられてきた工法で、伝統的なものである。鉄線でかごを編み、中に石をつめこんで用水路の両側に並べていく。石がふんだんにあるアフガニスタ

ンの地では、家作りや畑の仕切りにも石を使い、石を利用して何かを作るのはお手の物だという。中村哲医師は資金や機材にお金をかけず、地元の人々が安易に補修、改修できる技術を伝えたのだ。

現在、水道の蛇口をひねれば水が飲める日本の水道技術は非常に高いと思う。光圀や中村哲医師の功績の一部を知り、日本の水に対する技術の高さが培われた歴史を誇りに思うと同時に、世界各国であたりまえに水を確保できない地域が少なくないことを忘れてはならないと思った。最新技術にこだわらず、日本の伝統的で安価な水道技術を利用することで救われる地域はまだあるのではないかと思う。

「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年 5月31日

閣 議 了 解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるための諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決をはかり、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することといたしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の上旬が適当であるので、その初日である8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

第47回「全日本中学生水の作文コンクール」茨城県審査について

1 募集要領

(1) 趣 旨

「水の日」及び「水の週間」の行事の一環として、次代を担う中学生を対象とした作文コンクールを実施することにより、広く水に対する関心を高め、理解を深める。

(2) テ ー マ

水について考える（題名は自由）

(3) 対 象

令和7年度に県内中学校、中等教育学校1～3年次及び義務教育学校7～9年次に在学中の者

(4) 応募締切

令和7年5月8日（木）

(5) 原稿枚数

400字詰原稿用紙4枚以内

2 応募状況

(1) 応募総数

230編

学年別 1年 94編 2年 57編 3年 79編

(2) 応募校

6校

茨城大学教育学部附属中学校 県立鹿島高等学校附属中学校 県立竜ヶ崎第一高等学校附属中学校 清真学園中学校 水戸市立第一中学校 水戸市立第四中学校

3 審 査

(1) 審査方法

予備審査を通過した作品について、茨城県審査会（令和7年5月28日実施）で審査を行い、最優秀賞1編、優秀賞4編、入選5編及び学校奨励賞1校を選定した。（学校奨励賞は水戸市立第四中学校）

また、入賞した上位5作品について、国土交通省で行われる中央審査に推薦することも併せて決定した。

(2) 審査基準

① 優秀作品

テーマ「水について考える」にふさわしく、日常の生活体験や学習を通じて得られた内容で、次の基準を満たすもの。

- ・水の貴重さ、水資源開発の重要性などが適切にとらえられていること
- ・将来の夢、提案等が中学生らしくまとめられていること
- ・抽象的、観念的なものではなく、地域性や実体験等、具体的な事柄が描かれていること
- ・字句の正確さや、文章の構成がよくできていること

② 学校奨励賞

当コンクールに積極的に参加していること

(3) 審査委員

委員長 株式会社LuckyFM茨城放送 代表取締役社長 阿部 重典

委 員 株式会社茨城新聞社 統合編集・DX推進本部編集局長 斎藤 敦

〃 茨城県企業局企画経営室 室長 新原 勝人

〃 茨城県土木部 災害・防災対策監兼河川課長 橋本 則保

〃 茨城県政策企画部水政課 課長 高橋 義徳

4 表 彰

(1) 表彰式

令和7年7月29日（火）

(2) 賞及び副賞

最優秀賞（茨城県知事賞） 1名 賞状、副賞（図書券）

優秀賞（茨城県知事賞） 4名 〃

入 選（茨城県知事賞） 5名 〃

学校奨励賞（茨城県知事賞） 1校 賞状



茨城県

茨城県政策企画部水政課
〒310-8555 水戸市笠原町978番6
電話 (029) 301-2625
<http://www.pref.ibaraki.jp/>